

文教大学教育学部学校教育課程音楽専修実技

声楽・コールユーブンゲン 説明資料

音楽専修 声楽担当 三谷 亜矢

音楽専修の実技試験において、「歌」にかかわることの留意点をまとめてみました。
演奏録画作成の際にお役立ていただければと思います。

<目次>

1. 「声楽」について p.2
 - (1) 身体の使い方
 - (2) 響きについて
 - (3) 発音について
 - (4) 表現について

2. 声楽課題曲について
 - (1) Vergin, tutto amor p.3
 - (2) Caro laccio, dolce nodo p.4
 - (3) Sebben, crudele p.5
 - (4) ゆりかご p.5
 - (5) 夏の思い出 p.6

3. コールユーブンゲンについて p.7

4. コールユーブンゲン課題曲について
 - (1) No.54 p.7
 - (2) No.55b p.7
 - (3) No.56b p.7
 - (4) No.58a p.8
 - No.58b p.8

1. 声楽について

声楽の様々なテクニックを大学で学ぶ為には、発声を妨げる「癖」が少ないことが重要です。

(1) 身体の使い方

「声」は喉にある声帯が振動して発せられます。その振動は「呼気」によっておこりますので、安定した息を声帯に当てることが出来ると声がコントロールしやすくなります。その為にも

- ・首はまっすぐ
- ・肺の下部をしっかり拡げて息のスピードが上がりすぎないようにする
- ・肩や胸に力を入れない（特に息を吸う時に上がらないようにする）
- ・上半身が無意識に動きすぎないように（肘や肩で拍子をとらない等）
- ・安定してまっすぐ立つ為に、脚は開きすぎない（お尻を引き締められる程度が目安）

等に気を付けて、歌ってみてください。

(2) 響きについて

声帯から発する音は決して大きなものではありませんが、声楽はそれを鼻腔などで共鳴させ、増幅して響かせます。固くなってしまうと共鳴しませんので、口の奥や頬はリラックスする必要があります。通常日本語を話す場合は、口からダイレクトに息を吐きますが、声楽の場合は口の奥の天井（口蓋奥）に息を当てるようにして、鼻経由で息を吐くように意識をします。

ブレスの際にはあくびをするイメージで口の奥の空間を拡げておくと良いでしょう。

(3) 発音について

イタリア語・日本語いずれも、a,i,u,e,oの母音と、様々な子音によって成立しています。

子音は、唇(m/b/p/w)・舌(n/t/d/r/l)・歯(s/z/j)・歯と下唇(f/v)・上顎(k/h)等を正確に使用して、力まぎくりに発音しましょう。

歌の旋律は主に母音によって響き、奏でられますので、母音歌唱の際に口の奥が狭く固くならない意識が必要です。「u」「o」は唇を立体的に丸めて発音します。日本語会話での「あ・い・う・え・お」は口の奥が極端に狭い為、そのままでは響きにくいことを認識しておきましょう。

(4) 表現について

他の楽器演奏との大きな違いは「歌詞」がある、ということです。

演奏する曲の歌詞の意味を理解し、共感し、伝える意識を持って歌いましょう。それぞれのフレーズ前でその感情にふさわしいブレスが行えると、わかりやすい表現になります。言葉の意味と極端に違う表情にならないようにしましょう（悲しい歌詞で嬉しそう、喜ばしい歌詞で悲しそう等はNG）。作為的でなく、呼吸に伴う自然な体の動きや顔の表情で歌うことを目指してください。

2. 声楽課題曲について

イタリア語の発音は、ローマ字読みと一致するものが多いですが、少し異なる部分があるので気を付けましょう。

「r」子音は無理に巻き舌にしなくても構いませんが、舌先が前歯生え際に近い上顎を軽くさわるようにして、後ろに行き過ぎてこもった響きにならないよう注意しましょう。

「-」（ハイフン）は、まだその単語が途中であることを示していますので、そこでブレスしてはいけません。

(1) *Vergin, tutto amor*

イタリア語の歌で、副題が *Preghiera*（祈り）となっています。伴奏にはスタッカートが示されていますが、切れすぎないよう厳かな感じで弾いていただきますよう。
複合拍子なので、1小節をゆったりした4拍子の意識で演奏します。

「tutto」「peccator」「accenti」などの同一子音が2つ連続する部分は、その子音を長めに発音します。「トゥット」ではなく「トゥット」、「ペカトル」ではなく「ペッカトル」、「アチェンティ」ではなく「アツチェンティ」。但し「ッ」は日本語の促音とは異なり、喉の奥で息を止めるのではなくその子音を発音している部分（tなら舌先、kなら上顎、pなら唇 etc.）で息をせき止めます。

単語の中で母音に挟まれている「s」子音はzの発音になりますので「pietoso」は「ピエトース」ではなく「ピエトーズ」になります。

イタリア語のアクセントは強くするのではなく長くします。単語の後ろから2つ目にアクセントが付くことが多いです。下記のように2種類の母音が連続している単語で長くする方を間違えないようにしないとはいけません。

「suo」は「スオー」ではなく「スーオ」、

「muova」は「ムーオヴァ」ではなく「ムオーヴァ」

「suoi」は「スーオイ」ではなく「スオーイ」

「duol」は本来「duolo」の省略形なので「ドゥオール」ではなく「ドゥオール」

「quel」は本来「quello」の省略形なので「クーエル」ではなく「クエール」

「tuo」は「トゥオー」ではなく「トゥーオ」

20小節の付点4分音符での「to a」は、どちらの母音にもアクセントはありませんから本来は同じ長さで発音されるべきですが、3分割のリズムの流れを優先して、母音の長さ比 o:a=2:1「トーア」のように歌います。

トリル(tr)が楽譜に示されていますが、時代様式を考慮しますと書かれている音符の2度高い音から始めます。初めに2回ほど2度間を動かした後は書かれている音符の高さでのばします。

(2) *Caro laccio, dolce nodo*

イタリア語の歌で、ほとんど2度音程の動きで作曲されています。この時代の音楽は、隣り合う音の2度音程は最も濃い感情を表すと言われていいますので、細かいリズム音型の部分も慌てすぎず、丁寧に音程を意識してレガートで演奏しましょう。

「laccio」は「ラーチオ」ではなく「ラーッチョ」(cioは「チオ」ではなく「チョ」と発音します)
「pensier」は「ペンシエール」ではなく「ペンスィエール」(siは日本語には無い発音で「シ」ではなく「スイ」)

「ch'io」は「che io」の省略形ですが、「キオー」ではなく「キーオ」

「prigionier」は「プリジオニーエル」ではなく「プリジョニエール」(gioは「ジオ」ではなく「ジョ」と発音します)

「pur」は「プルー」ではなく「プール」(rの後にu母音を付けないようにします)

「,」の部分や「e (そして)」の前はフレーズとして成立すればブレス記号が書かれていなくても、ブレスして構いません。

音程が曖昧になりやすいのが2度下行の部分です。

11小節4拍目、15小節3拍目、24小節4拍目は**長2度**の音程

18小節4拍目、28小節2拍目は**短2度**の音程

19小節1拍目は**短2度**の音程

25小節1拍目は**長2度**の音程

これらの違いを明確に歌い分けてください。

15～17小節にかけては、下の楽譜のように母音の響きを伴わない音符が出来ないように、歌詞を入れて行きます(子音のみの音符は音の高さを母音ほど鳴らせないで、旋律がとぎれてしまいます)。

下記楽譜の歌詞にスラーを付けている所は、言い直さずに滑らかにつながります。

i il mi o pe en sie ro i i il mi o pen sier

19小節、21小節の前打音は、本来の音符が小節頭に来るように、小節線前に入れます。

(3) *Sebben, crudele*

イタリア語の歌詞、ABA¹の形式で作曲されています。転調を意識しながら演奏しましょう。

「sebben」はb2つを意識して「セーベン」ではなく「セーッベン」
「languir」は「ラングーイル」ではなく「ラングイール」
「voglio」は「ヴォーグリオ」ではなく「ヴォーリオ」(gliは「リ」と発音)
「lunghezza」は「ルンゲzza」ではなく「ルンゲーツァ」
「tua」は「トゥアー」ではなく「トゥーア」
「finezza」は「フィーエレzza」ではなく「フィエーレーツァ」

32小節の前打音部分は、以下のように歌詞を入れます。



「,」の箇所や「ti voglio」の前にブレスしても構いません。その際、慌ててブレスをするのではなく、次の文章を丁寧に始める意識で、意味のあるブレスをしましょう。

81小節は、最後の付点4分音符の入りが伴奏の3拍目と一緒にならないように気を付けましょう。古い時代の曲ですので、rit.が重くなりすぎないように。

(4) ゆりかご

日本語の歌詞ですが、明確なイメージを持って歌いましょう。「かいな」など、現代ではあまり使われない言葉があります。

歌詞の内容にふさわしい音量で歌うことも重要です。

ひらがなは、子音・母音が一体化しており響かせるべき母音の意識を持ちにくい文字です。ローマ字で歌詞を書くなどして、母音の流れを明確にしておきましょう。

イタリア語と異なり、日本語のアクセントは単語の最初にあります。圧力をかけて強くするのではなく、長めにすることで言葉が聞き取りやすくなります。作曲家は音符の長さを工夫して、言葉が自然に聞こえるように作曲していますが、「しろきかいな」の「か」や「くろきひとみ」の「ひ」は長い音符になっていません。気持ち丁寧な長さで歌うと良いでしょう。

「ふくよ」の「ふ」は通常「hu」で発音しますが、日本歌曲歌唱時は「fu」にして子音の空気音が明瞭になるようにします。「h」で発音しても、息が消費される割には子音が聞こえません。

「ゆりかご」の「ご」は鼻濁音で柔らかく。

2小節単位でプレスをして構いませんが、文章としては4小節1グループという意識で演奏します。1番と2番の旋律はほとんど同じですが、最後の2小節が異なりますので工夫して歌いましょう。

(5)夏の思い出

日本語の歌詞で、特に難しい言葉は使われていませんが、「おぜ」「みずばしょう」「しゃくなげいろ」「たそがれる」「うきしま」「まなこ」など、具体的なイメージを持てるようにしておきましょう。

「なつが」の「が」、「しゃくなげ」の「げ」は鼻濁音で。

8分音符の連続が多い曲ですが、均等な長さで歌うのではなく、フレーズや言葉にふさわしい抑揚が付いていることが望ましいです。

12小節は歌詞の違いにより1番と2番で歌うリズムが変わります。1番は3連符ですが、2番は16分音符のリズムにします。

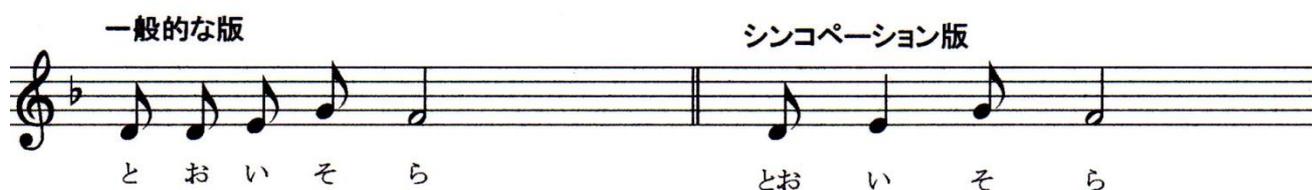


2番の16小節目は、最後のフェルマータに向かって rit.し、フェルマータの付点4分音符+4分音符、プレスとして4分休符くらいを基準にしてたっぷり演奏します。

1番16小節目では、遅くなり過ぎない方がよいでしょう。

休符を見落とさないようにしましょう。休符を活かしてプレスすることにより、作曲家が意図している表現になります。

歌い終わり「とおいそら」のリズムが楽譜によってはシンコペーションになっていますが、一般的には8分音符4つで歌う場合が多いようです。今回はどちらで演奏されても構いません。



3. コールユーブンゲンについて

コールユーブンゲンは「Chor (合唱) Übungen (練習)」そのタイトルのとおり、コーラスの練習の為に作られた練習曲集です。正しい和声感、リズムを身に着けることを目的としていますので、大切なのは「正しい音程」「正しいリズム」です。また、コーラスでは揃って決められたところでブレスすることも重要ですので、「ブレス記号が示されている所で必ずブレス」します。

「声楽」の試験では表現力や声量、発声法なども重要視しますが、コールユーブンゲンでは声の良し悪しではなく上記の3点が達成されているかどうか重要なポイントです。

- ・ 固定ド唱法で歌ってください。
- ・ ブレスには時間が必要ですので、ブレス記号で吸気する場合はその前の音符を早めに切り上げてブレス後の入りが遅れないようにします。休符でブレスする場合は、休符の長さを使って吸気します。
- ・ 拍感を保つために、体側でリズムを打っても構いません。
- ・ ドレミファソラシの「シ」は本来「si」ですので、「スイ」で発音することが望ましいです。
- ・ 付点のリズムが3連符のようにならないようにしましょう。

4. コールユーブンゲン課題曲について

(1) No.54

4分の3拍子ではなく8分の3拍子です。テンポが遅くなりすぎないようにしましょう。曲中の長いフレーズが歌い切れるテンポが基準になります。

16分音符で細かく動いている部分と、8分音符以上の長い音符の部分があります。細かくない部分でテンポが変則的に速くならないようにしましょう。

音程の大きな部分で高さに合わせて首が上下しすぎないようにしましょう。

休符では、その前の音符が長く残らないように気を付けてください。

最後の音はフェルマータが付いていますので倍の長さにします。

(2) No.55b

音符の数は多いですが、4分の4拍子なので8分の8拍子にならないように演奏します。

4小節目冒頭のシンコペーションのリズムが崩れないようにしましょう。

「タイ」の部分で拍が曖昧にならないように気を付けましょう。

7～8小節は音の起伏の変化が多いので、特に音程に気を付けて歌ってください。

(3) No.56b

多く出現する7度音程や6度音程が1つのポイントの曲です。低い音で息のスピードを速くしすぎると、音高が想定より上がりやすくなりますので、息のコントロールが必要です。

冒頭が 2 分音符なのでテンポが速くなりやすいですが、曲中間部分の 8 分音符を基準にしてテンポを決めましょう。

曲最後の音まで長さに気を付けて演奏しましょう。

(4) No.58a

8 分の 12 拍子は複合拍子ですので、1 拍を 3 分割した 4 拍子として演奏しますので、テンポが遅くなりすぎないようにしましょう。

3 小節などにある付点のリズムが曖昧になって遅くならないように気を付けてください。

8 分休符とブレス記号、どちらも息を吸います。

「タイ」が多く使われていますが、拍頭を常に意識してテンポが揺らがないようにしましょう。

曲最後のフェルマータの付いた音は倍の長さにします。息が足りなくなる場合は、タイの「ファ」又は「レ」後にブレスを加えてください。

No.58b

「弱起」(3 拍目から開始) の曲ですので、空白の 2 拍を意識して歌い始めましょう。

高い「ファ」以降の 2 小節は平行調の響きになっており、音程やリズムが不安定になりやすい部分です。

音高が下がってから再び上がる時に、低くなる場合が多いので気を付けましょう。

曲最後は弱起の曲の為、不完全小節になっており、2 拍で終わりになります。長くのばしすぎないようにしましょう。